cafe talk_03

ゲスト　クロダユウイチさん　写真家
市野孝洋さん　デザイナー
中塚啓貴さん　栢木伸悟さん　建築家

03号の制作に関わったクリエイターと、enocoスタッフによるカフェトーク。今回、架空の犬キャラクターのための家の撮影に至る経緯を伺いました。

—— 市野さんとの最初の打合せの時点では、まさかエノケンが家（人呼んで「エノコヤ」）を手に入れるとは思いませんでした！

市野　エノケンをフィーチャーして何かしたいなと思ってスエロさんに相談したんです。いろいろな人が関わるほうが面白いだろうというのもあって。

—— 今回、家ができる過程でだんだんキャラクター設定がすごくはっきりしてきて、エノケン自体の存在感がかなり増しました。

中塚　クライアントをよく知って、掘り下げないと家はつくれないので！

栢木　市野くんと「エノケンってどんな犬や？」話で盛り上がって（笑）。

市野　エノケンはパンケーキが好物で、カフェ周辺によくいる設定です。

栢木　でも飼われてはないよな、ということで可動式のテントっぽくなりました。

中塚　ボートハウスを作って木津川に浮かべる案もあったんですけどね…。

クロダ　でも今日エノケンは確かにここに存在してましたよね。笑いっぱなしで、あっという間の現場（実際は13時〜19時の長丁場！）でした。

クロダユウイチ
1981年生まれ。青森県出身。和歌山を拠点にフォトグラファーとして活動中。LOOP CREATIVE UNITと共にweb制作にも携わる。

市野孝洋（いちのたかひろ）
1981年奈良県生まれ。グラフィックデザイナー。

スエロ建築研究所（すえろけんちくけんきゅうじょ）
中塚啓貴（なかつかひろき）、栢木伸悟（かやのきしんご）、高橋智也（たかはしともや）。住宅設計、公共建築改修からインテリア、地域ブランディング、イベントまで、カタチの有無に関わらず設計、デザインを行う。suero-archi.com/

ninOval cafe

enoco地下1階　営業時間：11:00−18:30（月曜日定休）

「食べログ」大阪パンケーキ第2位！全国6位のカフェが地下1階に！

とろふわ口どけのパンケーキでおなじみの、二ノーバルカフェ江之子島店がメニューも新たに、フードも充実！ハワイスタイルのロコモコは肉の旨味たっぷりのハンバーグと共に！おとなな味わいのナポリタンも、名物になりそうな予感。もちろんパンケーキも、よりいっそうの美味しさを追求して改善を重ねています。ドイツの有名メーカー・ダルメイヤのフレーバーティーとあわせてお楽しみください。

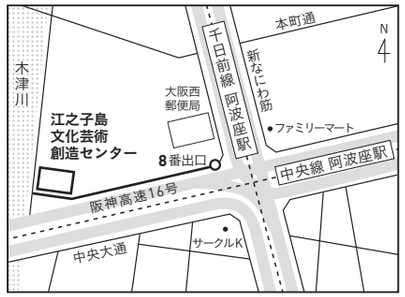
enokojima creates osaka
enoco

大阪府立江之子島文化芸術創造センター［enoco］
Enokojima Art, Culture and Creative Center, Osaka Prefecture

アートやデザインの創造力で、都市を元気にすることを目指し2012年4月にオープン。展示室や多目的室のレンタル事業を行うほか、企画展や公演、セミナー・ワークショップなどを開催し、クリエイティブな人や情報が行き交うプラットフォームとなることを目指しています。

〒550-0006　大阪市西区江之子島2丁目1番34号
開館時間：10:00〜21:00（ただし展示室は11:00〜19:00・日曜日は11:00〜16:00）
月曜・年末年始休館
電話：06-6441-8050｜FAX：06-6441-8151
メール：art@enokojima-art.jp
www.enokojima-art.jp

［アクセス］
大阪市営地下鉄千日前線・中央線「阿波座駅」下車、8番出口から西へ約150m。徒歩約3分。



enocoニュースレター 03
2014年10月発行

｜発行｜ 大阪府立江之子島文化芸術創造センター
｜編集｜ 峯恵子（enoco 企画部門）
｜アートディレクション｜市野孝洋
｜デザイン｜浜田茜（000 Projects）
｜撮影｜クロダユウイチ（表紙、p.1）
｜エノコヤ制作｜スエロ建築研究所
｜イラスト（エノケン、似顔絵）｜ タダユキヒロ

「enocoニュースレター」は、enocoが年4回発行する情報誌。enocoで起こっていることや、enocoにかかわる人々が日々考えていることをお伝えしていきます。

enoco
03

江之子島文化芸術創造センター｜enocoニュースレター｜2014｜
03

写　真　クロダ ユウイチ
エノコヤ　スエロ建築研究所
デザイン　市野孝洋

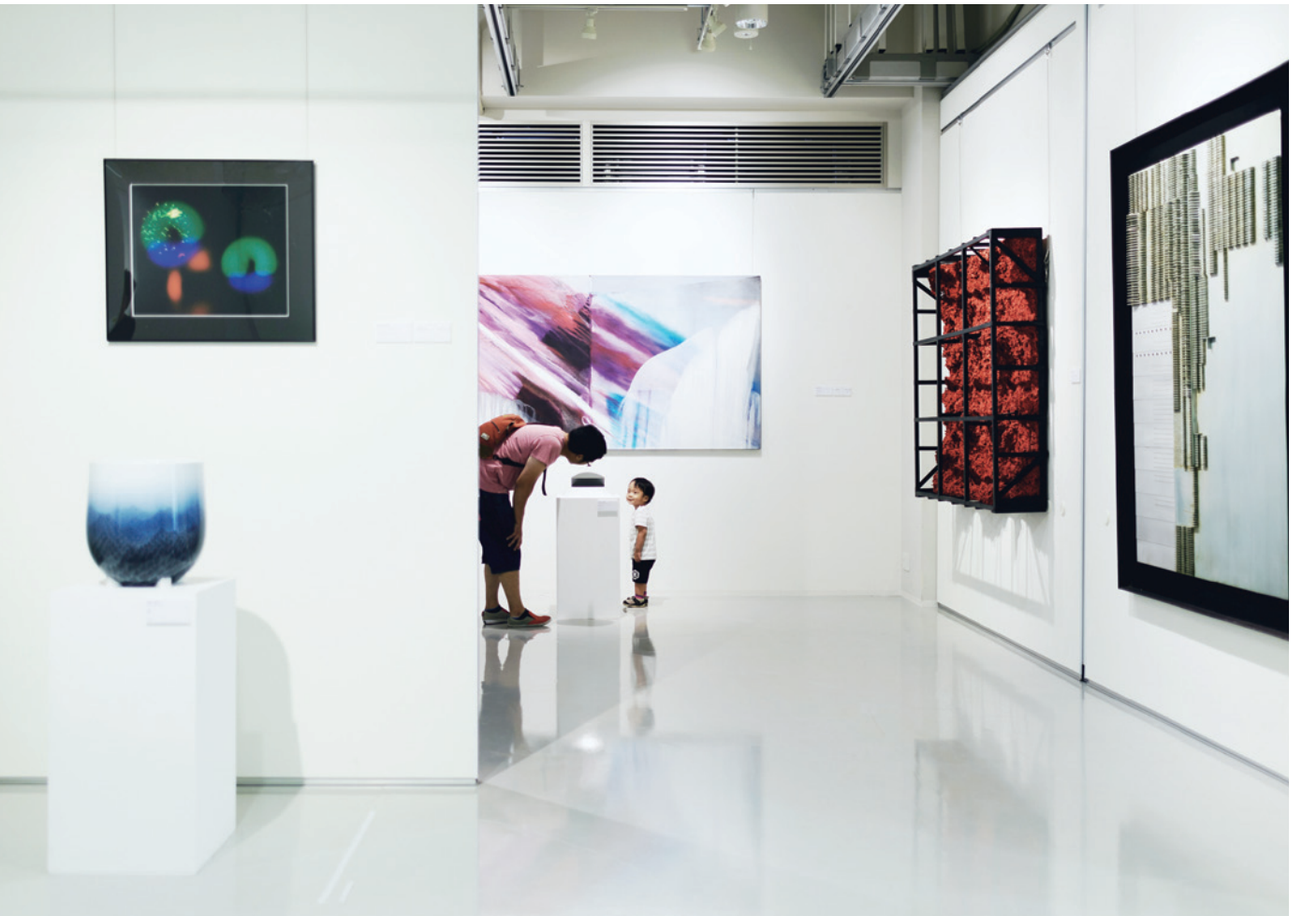
江之子島文化芸術創造センターenocoがお送りする「enocoニュースレター」。
表紙と巻頭は、毎号異なる大阪のクリエイターたちが担当します。
03号ではデザイナーと写真家、そして建築家の手により、
紙面に登場するキャラクター「エノケン」の家「エノコヤ（小屋）」が完成。
紙面上でも、クリエイターたちの新たな交流が生まれています。
ニュースレターとともに全国へ旅するエノケンのため、エノコヤはくるくると丸めて持ち運び可能です。

www.enokojima-art.jp

enoco × 大阪府20世紀美術コレクション

大阪府では、「大阪府20世紀美術コレクション」として
約7,800点におよぶ美術作品を所蔵しています。
enocoでは、テーマに沿って展覧会を企画し作品を公開するとともに、
これまでとは違う新しいかたちで作品と関わる方法を模索し、
さまざまな活動に取り組んでいます。
2014年、大阪府20世紀美術コレクションを並べたenocoの展示室で、
演劇作品『gallery（extra version）』が上演されます。
美術作品と演劇のコラボレーションとなる今回。
学芸員と舞台人、それぞれの立場で
enocoのプログラムに関わるお二人にお話を伺いながら、
コレクションに関するこれまでの活動についてご紹介します。

「アートでつむぐ、5つのストーリー ー5人の市民キュレーターによる 大阪府20世紀美術コレクション展」展示風景
作家名 / 作品タイトル：藤井 朱明「明」/ 田中 幸太郎「ノクターンA」/ 金光 松美「8月の嵐」/ 清水 久兵衛「WIG-76」/ 上前 智祐「作品（赤・黒い木枠）」/ 森口 宏一「作品62-H」



インタビュー1　中塚宏行さん（大阪府都市魅力創造局文化課 主任研究員）

学芸員 × コレクション

中塚宏行（なかつか・ひろゆき）

1954年 大阪府生まれ。大阪大学文学部美学科（美術史専攻）卒業。1977年～ 92年 北海道立美術館（札幌、旭川、函館）の学芸員、学芸課長を経て、1992年より大阪府文化課、現代美術センターを経て、現在、大阪府都市魅力創造局文化課 主任研究員（美術総括）、美術評論家連盟、民族藝術学会会員。
論文「オブジェと記号」（1977）、著作集「美術／漂流」学芸員Nの30年（2007）、展覧会「描かれた文字／書かれた絵」（1989）、「金光松美展」（1998）、「上前智祐展」（1999）ほか

1974年、府立現代美術センターの設立とともに収集が始まった大阪府20世紀美術コレクション。戦後関西の美術作家たちの作品をはじめ、国際公募展「大阪トリエンナーレ」入賞作品、「現代版画コンクール」、「国際花と緑の博覧会」に出品された写真や陶磁器、書、セビリア万博に出品されたサイエンスアートなど、多岐にわたる作品がコレクションされています。enocoでは、自主企画の展覧会や全国の美術館、公共施設への作品貸し出しを積極的に行うほか、さまざまなプログラムを通して作品を公開しています。

Q_ ほかの美術館や文化施設と比べてみて、コレクション作品と関わる上でのenocoの特色はなんですか？

美術コレクションを所蔵してはいますが、「鑑賞する美術」にとどまらないところでしょうか。美術の世界全体を改めて見渡してみると、美術として扱う領域そのものがかなり幅広いものになってきています。前身である「現代美術センター」からenocoに変わって以降、さまざまなジャンルで活動する人々と積極的に関わろうという傾向が強くなっていて、創造的な分野で活動している人、もの、状況をすべて飲み込み、より幅広い層にさまざまな方法でアプローチしていくことが求められているように思われます。ダンス、演劇、さらにデザインやまちづくりなど、以前は美術と少し離れたものと考えられてきたものであっても敏感に、積極的に取り入れることは、美術が現代化していくなかでの必然なのかもしれません。また美術の最近の動向を見ると、街や地域の中での展開や、コミュニケーションとしてのアートといった側面や考え方が強くなっていると感じますね。

Q_ 大阪府のコレクション活用については、どのように考えていらっしゃいますか？

実は「コレクション」という考えかた自体が従来の美術館的発想なので、コレクションそのものと現代美術の最新の動向とをどう結びつけるのかということには少しギャップがあって、なかなか難しいです。従来型の美術館のように、しっかりした展覧会を企画したり作品のメンテナンスや保存を確実に進めたりと、やるべきことはたくさんありますが、enoco と大阪府に課せられた一番の課題は、これからの時代や場所に即した美術との関わりかたや新しいコレクションの活用方法を考え、実践するということだと思っています。具体的には作品をもっと色々な層の人に見てもらい、活かしていくという考え方を基本にしつつ、従来の鑑賞方法や保存のしかたでは現代の美術動向に対応できなくなってきているという問題もあるので、現代における美術館あるいはアートセンターのあり方をしっかり考えていかなければならないと考えています。

Q_ 今回、他のジャンルとのコラボレーションということで、演劇を主な活動のフィールドとする dracom とのプログラムに作品解説者として参加されてみて、いかがでしたか？

ひと昔前までの美術館の鑑賞、あるいは解説のしかたというのは、「これはすごい作品なんですよ」「作家はこういう人物ですよ」「こういうふうに見なさい」というように、簡単にいえば美術館側が教え、情報を与えるという一方通行的な方法でした。しかし最近では、単なる知識であれば簡単に自分で手に入れることができますよね。別に専門家の話を聞かなくても、スマホでちょいちょいっと検索すれば基本的なことはすぐに分かってしまいます。なのでどちらかというと、鑑賞する側が「自分はこう思う」と発信しながら作品に関わっていくことが必要な世の中になってきているのかな、ということを enoco の活動を通して感じています。作家の意図を知識として持つのはいいことだけれども、本来ものの見方は自由なので「こう見なければならない」という唯一の正解はないはずです。例えば作品を鑑賞しながら感想を述べ合うという今回のワークショップの中でも、面白い発想だったり自由なものの見かたがどんどん出てくるというのは、長年学芸員として働くなかで少し頭が固くなってきている私自身にとっても新鮮に感じられました。今回だけではなく、関わらせて頂く他のプログラムにおいても同じことで、さまざまな発想やものの見かたに触れることで、とても刺激的な体験ができているなと思います。

Q_ ちなみに中塚さんご自身で、コレクションの中で特にお好きな作品はありますか？

うーん、好きなものとなると難しいけれども、単に表面的にきれいなものではなく、ちょっとヘンで謎めいたものというか、一見よくわけが分からないけれど心に何か引っかかるようなものが好きです。ものすごい情熱をかけてヘンなもの作ってるなとか、ヘンなことやっているなとか、最初はよく分からないように感じても、自分なりに情報なり知識を仕入れて謎を解き明かしていく中で、なるほどなと納得することができたときはすごく嬉しい。またそこに何か深い知性のようなものを感じ取ることができればよりいっそう幸せに感じます。これは美術作品に限ったことだけではなく人間そのものについても言えるし、何事にもそういう側面があるのではないかなという気がしますね。

インタビュー２　筒井 潤さん（公演芸術集団dracomリーダー / 劇作家 / 演出家 / パフォーマー）

舞台人 × コレクション

筒井 潤（つつい・じゅん）

dracomリーダー/演出家/劇作家/パフォーマー。2007年dracom『もれうた』で京都芸術センター舞台芸術賞受賞。2014年セゾン文化財団セゾン・フェロー。dracomでの劇作・演出の他に、演劇計画2008（ソン・ギウン作『小説家仇甫氏と京城の人々』リーディング演出）、高槻シニア劇団、桃園会、We dance、Dance Fanfare Kyoto、Dance Box『新長田のダンス事情』などのプロジェクトやグループに関わり、山下残、松田正隆/マレビトの会、きたまり/KIKIKIKIKIKI、松本雄吉/維新派、羽鳥嘉郎などの作品に出演。
http://dracom-pag.org

この秋enocoの展示室を舞台に上演される演劇作品『gallery（extra version）』は、北摂を拠点に活動する公演芸術集団dracom（ドラカン）が美術作品とのコラボレーションを試みた作品です。全3回にわたるワークショップ「『gallery』の声」を通して美術作品を鑑賞している人々の声を集め、参加者の言葉がストーリーに反映されるというユニークな作品ができあがりました。

Q_ 演劇作品『gallery』は、どんな作品ですか？また、enocoでのワークショップを重ねながら戯曲の再制作をするという体験をされて、いかがでしたか？

もともと『gallery』は、横浜のblanclassというスペースのギャラリーで公演するためにつくった作品です。ギャラリーで上演するにあたって、ベタに美術作品を見ている人を題材に新作を作ろうということになり、あらかじめ録音した音声ガイドの声でストーリーが進むという作品になりました。初演の脚本にはモネとか、ムンクとか、誰でも知っている有名な作品の評論テキストを大幅に引用していて、舞台装置として絵画の代わりに鏡を置いています。お客さんはその有名な作品を頭の中で思い浮かべながら、音声に合わせて動く俳優を見るという感じになるんです。でも今回enocoの展示室で再演するにあたって、本物の、しかも現代の美術作品と同じ空間で上演するとなったら、これまでと同じいうわけにはいかない。なかには新しくてまだ評価が定まりきれていない作品すらあったりするわけで、それに対して僕が勝手に何か書くのではつたないなと思ったんです。かといって学芸員やプロの方にすべてのテキストをお願いするかっていうと、それも違うと感じました。なのでワークショップを開いて、作品を見た感想を僕じゃない誰かに話してもらうことによって、意外な言葉をたくさん集めようと考えました。実際に3回ワークショップをやってみて、当然ながら面白さも難しさもあったんですが、僕一人では絶対に思いつきようもない言葉や表情が本当にたくさん集まりました。楽しかったです。本当に。

Q_ 筒井さんがリーダーを務められているdracomは、ユニークな作風の劇団として関西の演劇シーンでは知られていますが、現在の作風に至る契機のようなものはありましたか？

そもそも活動の始まりは劇団ドラマティック・カンパニーという名前の劇団で、1992年に大阪芸術大学の仲間と一緒に結成しました。最初は演劇のつくり方を知らなかったので、とにかく色んな作品に出てみたり自分でもつくってみたりというのをやっていました。その頃まで僕は本当に単なる一般的な演劇畑の人間として活動していたんです。それが大学院に進んで制作よりも研究中心になるにつれて、美学なんかを学ぶようになりました。まあ授業の内容は全くチンプンカンプンだったんですけど、先生が余談みたいな感じで話題にする現代美術の作品の話がすごく興味深かったんです。例えばプールいっぱいにゼリー状のものを満たして、ウェットスーツを着てその中を歩くっていうだけのものがあったりして。そんな話を聞くと、すっごい面白いことをしている人が世の中にはいるんだなっていうことに衝撃を受けてしまうわけです。それに対して自分が演劇のちっちゃいところで収まっているのがもどかしくなってきて、このままではいかんなとは思うんですけど、いかんと言いつつ、すでに劇場を押さえているので公演をしなきゃいけない。作家として何か本を書かなきゃいけないんですが、僕はもうそのとき書く意欲を完全に無くしていて。面白いものが世の中にたくさん存在する中で、もはや台詞を書いてそれを演じるっていうこと自体がちょっとバカバカしいというか、自分の言葉に対して何か陳腐なものを感じたんですよね。それで悩んだ末、思いつく言葉をどんどん羅列して、全くでたらめな本を作っちゃったんです。台本には役名を入れずに、出演者みんなでサイコロを振って、出た目の大きい順に台詞を取っていって、あたかも自然に会話しているかのように演技するっていう演劇としてはかなりチンプンカンプンな作品ができたんですけど、そこからですね。こじんまりした演劇という枠にとらわれずに活動してみようというふうに動き出したのは。そのとき、名前もdracomに変えました。ドラマティック・カンパニーっていうイメージとちょっと合わないなと思って。

Q_ enocoでは今回の取り組みを「コレクション作品とほかのジャンルとのコラボレーション」というふうに考えているんですが、ジャンルというものについてはどう思われますか？

実は演劇という小さい枠の中でも、もはや演劇と呼べるんだろうかっていうものがたくさん出てきています。以前のように、人を驚かせてやろうと努めて新しいものが出てきたっていう感じじゃなく、普通に面白いことを追求したらそうなったというアーティストが増えてきているような気がしていて、ジャンルについての考え方自体が変わってきているんじゃないかなと思います。今回の『gallery』でもそうなんですが、dracomでは声が全部録音されているうえに、身体表現としてはいわゆる日常の所作とは違う動きを混ぜるという作品が多くて、一時はもう自分の作品をダンスだって宣言しちゃっていいかもっていう考えもあったんです。でも僕が演出やパフォーマンスで影響を受けた方に、「筒井くんは演劇で行ったほうがいい」って言われて。それで素直に、あ、ダンスとかは言わんとこ、と思い直して「演劇枠」で続けたんです。今となっては、僕らがやっていることの特異性を示すにはやっぱり演劇のほうがふさわしかったなと思っています。ダンスって宣言しちゃうと、身体ありきの身体的なものとして作品を見られるような気がするんですが、演劇として見てもらうことでより色んな見かたをしてもらえたのかもなと。芸術っていう大きい枠で考えたときにも、似たようなことはきっとあるでしょうね。

Q_ ひとりのアーティストとして、コレクション作品という、いわば他人が作ったものと対峙しながら作品制作をするというのはどんな感じでしたか？

これまでの『gallery』では実際の美術作品が存在しなかったので、観客は言葉と身体を見ているだけだったんです。でも今回、本物の美術作品がその場にあるっていうのは想像以上に恐いなと思っています。演劇でなにか物がある場合は、作品を説明するために必要な物であったり、単なる装飾であることがほとんどで、主だって必要なのはやっぱり俳優の身体とそこから出てくる声なんです。でも美術作品が舞台上にあったら、それは紛れもない本物であって単なる舞台美術とは思わない、思えないものがあるっていうことなんです。例えば僕の人生について僕が語るっていう作品を作って、僕が舞台に立ってそれを語った場合、自分のこととはいっても僕は演じることになるだろうし、お客さんも僕のことだとは分かっていつつも、演じてるというふうに見る訳ですが、美術作品は演じないんですよ。それそのものとして完結しちゃっているんです。そういうものと同居しながら作品をつくるっていう生まれて初めての恐怖感はありますね。自分めっちゃ難しいことやってるやんっていう。もちろん楽しみながらというのは大前提ですが、大変なことになっているなっていうことには、幸い僕は気づいています。気づくっていうのがまた大事なことだなとも思っていますけど。

まだまだあります！

enoco × コレクション

所蔵品展「ミクロコスモス―大阪府20世紀美術コレクションより」（2014）

コレクションの中から、身体をイメージさせる作品を選んで開催された展覧会。会場ではdracomのワークショップも行われました。

エントランス展示（常時公開）

enocoの玄関でいつでも見られるミニ展覧会。定期的に展示替えされています。

市民キュレーターワークショップ（2014年度は年2回開催）

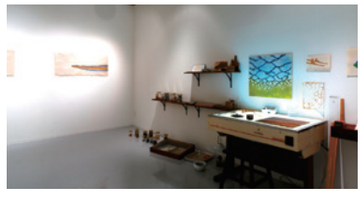
一般公募で市民キュレーターを募り、それぞれが企画した展覧会を一般公開します。展示作業やギャラリートーク実施も体験できます。

20世紀美術コレクション連続講座（2014）

毎回一人の作家にスポットを当て、作品や作家の人となりについて、学芸員がわかりやすく解説します。

セレノグラフィカ「絵を踊る/絵と踊る」（2012）

絵画作品の展示空間で、ダンス作品を上演しました。



eno-co-labo vol.1 木版風景「木はわたしの鏡」（2013）

現代美術作家ふるさかはるかさんと所蔵品のコラボレーション展示。版画作家のアトリエを再現しました。

これからのイベント情報

大阪府20世紀美術コレクションより

津高和一展〜抽象のエスプリ〜

©Waichi Tsutaka

このたびenocoでは、大阪府20世紀美術コレクションの中から、戦後関西を代表する抽象画家、津高和一（つたか・わいち）の作品をご紹介します。
1911（明治44）年大阪に生まれ、阪神淡路大震災での被災により83歳の生涯を閉じた津高和一。具象絵画からスタートし、その後抽象に転じて以降、サンパウロビエンナーレやグッゲンハイム賞美術展にも参加するなど、日本国内のみならず海外でも活躍し、高い評価を受けました。また一方で、神戸を発祥の地とする大型書店ジュンク堂のブックカバーを手掛けるなど、身近で親しみやすい一面もあります。今回の展覧会では、油彩画の大作の中でも特に60年代以降のものを中心に、自由でありつつも詩情をたたえる作品をご覧いただきます。
—
開催期間：2014年9月23日（火）〜10月5日（日）
10：00〜19：00
会場：1階ルーム4
入場料：無料

まちが魅力的であり続けるためのプラットフォームとは？

Osaka Creative Forum

まちの魅力は、建築や道路、河川や公園などを複合的に捉えてエリアデザインすることで、引き出すことが可能になります。そしてエリアデザインを行うには、行政のスタンスや市民・企業活動のあり方、まちづくりや建築における社会性や経済性の踏まえかた、イベントや社会実験による規制緩和を視野に入れたトライアンドエラーなど、多様で継続的なアクションが求められます。
本フォーラムでは、1日目にはそれぞれの分野で活躍されている方々から、実例を交えつつお話を伺います。2日目はその発展形として、主に行政やNPOでまちづくりに携わる方々を対象に、日頃から抱えている具体的な悩みや疑問について、専門家のアドバイスを受ける機会を設けるとともに、シンポジウムや交流会を開催します。
—
開催日・会場：2014年10月24日（金）@朝日生命ホール（淀屋橋）、10月25日（土）@4階ルーム2
パネリスト（予定）：
Eliza Choo（Director / Conservation and Urban Design Group / Urban Redevelopment Authority）
木下斉（一般社団法人エリア・イノベーション・アライアンス 代表理事）
嘉名光市（大阪市立大学大学院 工学研究科 都市系専攻 准教授）
忽那弘樹（株式会社E-DESIGN 代表取締役）ほか（順不同）

公募プログラム入選アーティスト決定！

enoco［study?］#2

©Sunao Horikawa

「アートの可能性」や「社会に対してひらいていくこと」について、さまざまな問いを投げかけ合い、［study－能動的に勉強する・検討する・観察する・練習する］していく若手アーティスト・サポートのための公募プログラム、enoco［study?］。審査員とenocoスタッフによる厳正な選考の結果、東大阪出身、現在27歳の堀川すなおさんが選出されました。「目の前にある もの その本来の姿はなにか？」をテーマに、ひとつのものを数ヶ月間かけてじっくりと観察しながら繊細なドローイング作品の制作を行っている堀川さん。今回彼女が提示したのは、自分以外の他者とともに観察とドローイングのワークショップを重ね、私たちが共通にもつイメージについて考察するというプラン。約3ヶ月半にわたって、制作とアトリエ公開を重ねながら展覧会に至る［study?］がどのように展開していくのか、乞うご期待です。
—
｜アトリエ公開・ワークショップ｜
開催期間：2014年10月〜12月
※日程などの詳細については、webサイト等でお知らせいたします。
｜展覧会｜
開催期間：2015年1月10日（土）〜1月25日（日）
会場：4階ルーム2、入場料：無料

ハイパーパフォーマンスグループ MuDA　初の展覧会

MuDA EXHIBITION

MuDAは、ダンサー・振付、演出家のQUICKを中心に、作曲家の山中透、美術家の井上信太ら、各方面で活躍する異ジャンルのソリスト達が集まり結成された、ハイパーパフォーマンスグループです。生命、身体、負荷、儀式、宇宙をテーマに、多様なメディアを駆使したパフォーマンスが特徴です。2010年夏の結成以降、関西を中心に、九州、四国など、各地のフェスに出演。2012年2月、初自主公演「MuDA 男祭り」の開催を皮切りに、屋内外問わず今日まで様々な場所で公演を実施し、2014年夏にはブルガリア、クロアチアの2カ国、3都市で、MuDAとして初めてとなる海外公演を行いました。そしてこの冬enocoにて、「MuDA EXHIBITION」と題し、MuDAによる初めての展覧会を開催致します。過去の舞台写真や映像を用い、舞台で感じる生身のMuDAを新たな手法に置き換え、鑑賞物として提示します。期間中、パフォーマンスも実施予定です。
—
｜展覧会｜
開催期間：2015年1月9日（金）〜25日（日）　11:00〜19:00（最終日は16:00まで）
会場：1階ルーム4、入場料：無料
｜イベント情報｜
［オープニングパーティー］1月9日（金）、参加費：無料 ［スペシャルパフォーマンス］1月17日（土）19:00〜（予定）、参加費：1000円

エキシビションカレンダー

くわしくはホームページをご覧ください
http://www.enokojima-art.jp/

10月

9月26日（金）－10月5日（日）	dracom祭典2014『gallery』公演［ルーム1］
9月23日（火）－10月5日（日）	津高和一展［ルーム4］
7日（火）－12日（日）	新槐樹社 大阪支部展［ルーム1］
12日（火）－19日（日）	チャーチル会 大阪展［ルーム1］
12日（火）－19日（日）	森反伸一郎 個展［ルーム3］
12日（火）－19日（日）	ペントハウスの会［ルーム4］
21日（火）－26日（日）	紀凛会展PARTⅤ［ルーム1,3］
21日（火）－26日（日）	JRP大阪支部写真展［ルーム4］
28日（火）－11月2日（日）	紀凛会展PARTⅥ［ルーム1,3］
28日（火）－11月2日（日）	木版画＆水彩画2人展［ルーム2］

11月

11日（火）－16日（日）	第6回 和田秀明 洋画展［ルーム1］
11日（火）－16日（日）	大阪府土曜会［ルーム4］
25日（火）－30日（日）	紀凛会展PARTⅦ［ルーム1,3］
19日（火）－30日（土）	自主企画展［ルーム4］

12月

2日（火）－7日（日）	LIVE STORY4［ルーム1］
2日（火）－7日（日）	岡田篤彦 作品展［ルーム2,3］
9日（火）－14日（日）	第13回 国画会大阪作家展［ルーム1,2,3］
9日（火）－14日（日）	ベルギー・オランダ水彩画展［ルーム4］
16日（火）－21日（日）	第7回 芸術ran賞［ルーム1,2,3］
16日（火）－21日（日）	サカナヘンノヒトタチ［ルーム4］

各イベントの詳細・申し込み方法はホームページをご覧ください。

これまでのイベント

5人の市民キュレーターによる 大阪府20世紀美術コレクション展 アートでつむぐ、5つのストーリー

（2014年8月19日〜30日）

この夏、第3回目となる『市民キュレーターによる 大阪府20世紀美術コレクション展』が開催されました。「キュレーター」とは、美術作品をテーマにそって選定し、展覧会をつくる人たちのこと。今回は公募で選ばれた5人の市民キュレーターの皆さんに、キュレーターの仕事を体験していただきました。

展覧会のコンセプトやタイトルを考え、約7,800点におよぶ大阪府20世紀美術コレクションの中から作品を選び、割り当てられたスペースの中で作品配置や展示方法を検討し、実際の展示作業までを体験するという、なかなかにハードなプログラムです。

展覧会が完成するまでの過程においては、作家の意図と自分のメッセージとの関係をどのように考えるか、また来場者に積極的に鑑賞してもらうにはどのような工夫が必要かなど、展覧会づくりの本質に迫るような白熱した議論が交わされ、美術のプロであるはずのスタッフたちも改めて考えさせられるということもしばしば。

約2ヶ月間にわたる取り組みを経て、年齢、性別、職業もさまざまな5人の市民キュレーターの皆さんがそれぞれにつくり上げた展覧会のタイトルを並べてみると、実に個性的です。

『私のart of living〜どうぞ、アートを楽しみにうちへいらしてください〜』（上野美子さん）/『ある街角』（中出祥二さん）/『本当にいいものを選ぶ〜アートの中に見る、人にやさしい「もの」や「こと」』（林紀行さん）/『duet』（吉村 淳二さん）/『木いろ〜自然とエネルギー〜』（山本すみれさん）

また会期中にはギャラリートークが開催され、たくさんのお客様を前に作品解説をしていただくとともに、伝えたいメッセージや、自分と美術との関わり、市民キュレーターに応募した経緯などを熱く語っていただきました。トーク終了後の交流会には第1回、第2回に参加された先輩市民キュレーターの方々もいらっしゃり、大いに話が弾んでいた様子。プログラムを丁寧に継続していくことで、参加者同士のつながりができていく過程を目の当たりにすることができました。

主催である大阪新美術館建設準備室とともに回を重ねてきたこの展覧会も、次回で4回目となります。この冬開催の展覧会に向けて、近日中に新たな市民キュレーターを募集開始の予定です。

福元葉子 / enoco企画部門

enocoのそうだん［eno so done!］

（2014年6月12日〜）

近年、アートやデザインの力を活用した地域活性化の試みが全国各地で行われ、大阪でも「おおさかカンヴァス事業」や水都大阪パートナーズの一連の取り組みなど、官民協働による諸実践が成果を上げています。そのような試みに関心を持ちつつも「具体的に何から始めればよいのかわからない」、「壁にぶつかっていてブレークスルーがはかれない」といった悩みを抱える地方自治体職員の方々の声に応え、enocoでは各ジャンルにおけるプロのアドバイザーとマンツーマンでじっくりと向き合う相談プログラム［eno so done!］をスタートさせました。個別の事例や悩みに沿って語られる体験談やアドバイスからは、多くのヒントを得ることができたと大変好評です。NPO法人スマイルスタイルの塩山諒さんの回では、参加された大阪府こころの健康相談センターとスマスタによる新たなプロジェクトが動き出すなど、具体的な成果も出てきています。第2期では、「長崎さるく博」や「大阪あそ歩」といったコミュニティツーリズムで知られる茶谷幸治さんらをアドバイザーにお迎えします。第2期スケジュールなどの詳細は、enocoホームページをご覧下さい。

髙岡伸一 / enoco企画部門

FLAG ART EXCHANGE Düsseldorf × OSAKA 報告展

あなたがほしい i want you 展覧会＆トークイベント

（2014年6月21日〜7月5日）

©Takuma Uematsu, Yuki Hayashi / 撮影：植松琢麿

大阪のバイリンガルアートガイド「FLAG」とドイツ・デュッセルドルフ市文化局により、2013年11月同市のアートセンターWeltkunstzimmerにてアーティストインレジデンスプログラムが行われ、その報告展がenocoにて開催されました。

映像作品、彫刻、インスタレーション、それぞれが独立していたデュッセルドルフでの展覧会とは異なり、今回の展示空間では作品同士が相互に干渉しあう構成へと変化。また展覧会のクレジットにはアーティストの植松琢麿、林勇気と、キュレーターの小林公（兵庫県立美術館）、オーガナイザーの後藤哲也（FLAG/OOO Projects）の名前が並記され、このプログラムにおける4人の関係性というか、独特のチーム感が伺えます。

展覧会初日のトークイベントでは、展覧会や作品のコンセプトが語られるとともに、4人の男性による共同生活の様子が写真を交えて紹介され、展覧会やレジデンスプログラムを、アーティストとともにつくり上げるということについても改めて考える機会となりました。FLAGでは、これからもこのような試みを続けていくとのこと。楽しみです。

峯恵子 / enoco企画部門

enocolumn 03　嘉名 光市

大阪市立大学大学院 工学研究科 都市系専攻 准教授

enocoに関わる創造人たちによるリレーコラム。今回はアーバンデザインの専門家、嘉名先生が登場です。

魅力的な都市をつくる

都市にとって、その創造性は活力の源泉となる。あのまちは面白い人がいっぱいいる、あの都市はなんかオモロイことをやってくれるなあ、といった期待感、ワクワク感がさらにいろんな人を惹きつける。そして、また面白い人が集まり、新しい企画が生まれていく。そんなスパイラルが起きていると都市にパワーあるなあと感じる。つまり魅力的なのだ。僕が研究している都市計画は、近代に生じた都市病理の解決を起源にしている。かつての都市は、衛生、交通、住環境、公害、火事、地震など対応しないといけない課題はキリがなかった。都市の病気をどう直すかが、これまでは重要だった。そのことはこれからも変わらない。いま、成熟した時代に良くも悪くも僕らは生きている。水不足もないし、衛生環境も維持されている。いろいろあるが、なんだかんだいって、それなりに豊かな暮らしをみな享受している。これらはそれぞれの専門家たちが、都市病理と向かい合ってきた結果だ。しかし、そういう問題への対処が完璧であれば、都市は魅力的か？と言われれば、それだけでは不十分だ。行ってみたい都市、住んでみたい都市を考えてみたとき、もちろん最低限のインフラや安全性の確保は求めたいが、それだけでは都市の輝きはつくれない。どうすれば、都市は魅力的になるのだろう？それはなぜenocoができたのか？という理由とも深く関わっているように思う。じつは、僕たちは都市に問題が起きないようにすること、つまり病気を直すことは得意かもしれないが、都市を魅力的にすることについて、真剣に考えてこなかったんじゃないかと思う。これは都市計画に限ったことではなくて、都市政策、文化政策全般に通じる。それでは都市は輝かない。新しいアプローチが必要だ。新しいトライが必要だ。で、enocoができた。そう思っている。仏つくって魂入れず、という言葉があるが、いよいよ僕たちは都市に魂を入れるという段階にきた。そのためにenocoはある。まだ、方法は確立されていない。でも、ジャンルや既成概念を越えて大阪に魂を入れる、僕もそんなスタンスで研究に取り組んでいる。そしてそれは、enocoも全く同じだと思う。可能性は∞。ガンガン開拓してほしい。

嘉名光市（かなこういち）
1968年大阪生まれ。博士（工学）、一級建築士、技術士（都市及び地方計画）。研究テーマは都市デザインとその歴史、景観論、都心空間再生のデザイン論など。大阪、神戸など京阪神を中心として都市の再生に向けた都市デザイン、空間論に取り組む。大阪府・大阪市特別参与ほか公職多数。近年は都市の回遊性や賑わいの公共性、エリアマネジメントに関心をもち、社会実験やその評価、計画技術の開発について研究している。

次回リレーコラム担当は…
☞ **中立公平**さん（俳優・演出家・芸術監督）

リサとガスパール絵本原画展：ゲオルグ・ハレンスレーベンの世界

2004年に行われた展覧会図録です。フランス生まれの人気絵本「リサとガスパール」の世界を紹介しています。癒されたい方は是非どうぞ。

The red houses

スウェーデンって赤い家が多いそうです。外壁の赤色は酸化鉄（ベンガラ）の色で、鉱山資源が豊富なスウェーデンならではの家屋を集めた写真集です。

LIFE: LAUGHS LAST

80年近くの歴史を持つアメリカの雑誌LIFEの写真集です。「この写真に一言」なんていう、大喜利で使われそうなクスッと笑える写真ばかり。

To the Dogs／エリオット・アーウィット

1992年に行われた展覧会図録です。前半には犬を主役にした「To The Dogs」、後半には名作写真を集めた「Classics」を収録しています。

オン★ザ★レビュー

enoco地下1階の古書店「ON THE BOOKS」米田店長によるブックレビュー。アートブック・写真集・デザイン・建築・ファッションからマンガ・音楽・映画・オカルトまで、多彩なラインナップの中から（店長の）今の気分をあらわす4冊をご紹介します。

ON THE BOOKS　営業時間：11:00ー20:00（月曜日定休）
掲載の書籍は店頭・オンラインストアで販売中　**www.on-the-books.info**

みんなのえのこじま vol.03

奥村恵美子さん

映像プロデューサー・コミュニケーター
www.ch-okumura.com

enocoと関わりの深いクリエイターに、活動内容と江之子島周辺のお気に入りスポットをシェアしてもらうショートインタビュー。第3回は、enocoのシェアオフィスを拠点に世界を股にかけて活躍されている奥村恵美子さん。江之子島、最近どんな感じ？

ー簡単に自己紹介をお願いします。

映像の企画・制作の仕事をしていまして、「一人広告代理店」と呼ばれることも（笑）。一方で、10年ほど前から日本文化の精神性に興味を持ち、その映像化に取り組んでいます。世界共通言語である映像による文化交流が私のライフワークだと考えています。ヨーロッパの各地で上映会をしたり、この秋はenocoのギャラリーでハンブルク在住の日本人写真家の展覧会を企画させていただきました。

ーenocoの居心地はいかがですか？

なんとも言えない居心地のよさはありますね。ここで仕事をする人、使う人、あとはお掃除をされている人も、みんなこの建物に愛着をもっていますよね。使うことで建物は生きるんだなと、本当にそう思います。

ーおすすめスポットをひとつ紹介していただけますか？

この春から約３０分の自転車通勤をしているので、日々いろんな発見があります。靭公園も好きだし、阿波座ジャンクションも好きですが、飲みにいくなら京町堀の「MEASURE CUP」。200種類以上のバーボンウィスキーが揃っています。マスターの落ち着いたトークに癒されます。

BAR MEASURE CUP
〒550-0003 大阪府大阪市西区京町堀2-3-4
SUN YAMATO BLD 2F
06-6447-1538
火曜休
営業時間：18:00〜3:00

エノケンのひとりごと
僕のマイホーム、デザイナーズやで。
広げるとenocoの「e」の字やねんで。

enocoではシェアオフィス入居者&ホームページ広告バナー随時募集中！